

九鬼周造の時間論における「回帰」と復興

Recurrences on the thought of Shuzo Kuki and Recovery/Revitalization

高原耕平*1

Kohei TAKAHARA

1. はじめに：回帰する時間

本発表の目的は、関東大震災後の帝都復興事業に関する九鬼周造の意志を手がかりに、「復興」の時間性を回帰の観点から再考することである。

1928年、哲学者の九鬼周造(1888-1941)が、時間をテーマとした講演をフランスで行い、その終盤で次のように語っている。

五年前東京の大半を破壊した大地震の直後、われわれは東京に地下鉄の建設を始めた。私はそのときヨーロッパにいた。私は尋ねられた。「ほぼ百年毎に周期的にやってくる大地震でつねに新たに破壊されるように運命づけられている地下鉄を、なぜあなたがたは建設するのか」と。私は答えた。「われわれにとっての関心は、企てそのものであって目的ではない。われわれは地下鉄を建設しようとしているが、地震はそれを破壊するであろう。しかしわれわれは新たにそれを建設しようとする。新たな地震がまたしてもそれを破壊するであろう。しかし、われわれはつねに新たに始めるだろう。われわれが評価するのは意志そのもの、自己の固有の完成を求める意志なのである」と。(岩波文庫版『時間論』24頁)

わたしはこの九鬼の言明に、なにか不穏なもの、けれども即座に却下できないものを読み取る。かれの真意を理解するために、「時間の観念と東洋における時間の回復」と題されたこの講演の内容をまず検討しておきたい。

九鬼の意図は、「東洋的時間」の特徴を輪廻・円環・回帰の時間として解釈し、そうした時間の内部に生きる人間の生の意味を捉え直すことにある。輪廻の時間とは「繰り返す時間、周期的な時間」である。東洋の宗教でしばしば語られる輪廻思想を例にとろう。そこでは善因善果・悪因悪果によってあらゆる生命は次の生に生まれ変わる。虫や獣として生まれ変わるかもしれぬ。それは見た目にはさまざまな生を流転しているようだが、ある原因が次の結果を生んでいるにすぎない。因果の連鎖に着目すれば変化しているものは何もなく、つきつめれば同じ人間が再び同じ人間に生まれ変わるのも稀有なことではない。

ところで全ての生命が因果に沿って同じものに生まれ変わるのなら、それらの生命同士も同じ離合集散を繰り返し、同じときに同じ場所に再び集まるだろう。“生まれ変わり”といったファンタジーを用いなくてもよい。ひとつの発表会場に集まっている人びとがそれぞれの生を終え、無窮の時間が流れ、星と銀河が塵に戻り、再び惑星を形成し、極微の確率によって再び同じ環境、同じ文明、同じ学会が形成される。同じひとびとが同じ会場に集まる。それは現実的な確率としてはゼロに限りなく近いが、形而上学的には成立する仮定である。

こうして全ての存在の内容が全く同じものとして回帰するとき、時間もまた見分けがつかない。回帰を外部から観測するものがないためである。すなわち、いまこの偶然の瞬間は、これまで何度となく繰り返し、これからも何度となく繰り返す“同一の”瞬間なのである。

この際限なく回帰する円環的な時間からいかに解脱できるか、と九鬼は問う。東洋の思想的伝統は2つの答えを出している。第一は意志・欲望を否定する仏教の考え方である。明滅流転すると見える存在のなかでわたしはわたしであるという執着を知性によって否定するとき、「存在の奔流は停止される」。九鬼はこれを主知主義的超越的解脱と名付ける。第二に、日本的な道徳的理想として九鬼が挙げるのが、くりかえしの中で自己の固有の完成をめざす「意志」を肯定する思想である。九鬼はカントやニーチェを引きつつも、この思想を「武士道」と表現する。現代では時代錯誤の感が否めない表現ではあるが、苦しみや悲惨のなかで敢えてそれを自己の生として選び、「またしても、またしても」の生を肯定することに要点がある。主意主義的内在的解脱と九鬼が呼ぶこの思想の実践が、冒頭の「地下鉄」の言及である。

2. 回帰と「復興」

わたしの目的は、九鬼の思想を東西文明の比較のために提出することにあるのではない。そうした研究としては、たとえばすでに真木(2003)がある。それよりも、災害復興という立場において、時間の問題をいかに引き受けることができるか、という問いを九鬼の思索を導きの糸として考えてみたい。

*1 人と防災未来センター 研究員 Researcher, Disaster Reduction and Human Renovation institution

「復興」は基本的に円環的時間とは異なる時間性を持っている。とりわけ事業という点では、予測・計画・災害前からの向上という近代的な時間性を、直線的に右肩上がりに発展してゆく時間性を前提にしている。いかなる進歩も最後には同じところに戻るのだと達観する九鬼の東洋的・円環的な時間は、この近代的・直線的な時間を否定する。技術の進歩、制度や学説の改良の恩恵を受け、またそれに献身するわたしたちは、輪廻転生や回帰といった幻影に遊ぶ九鬼の所説を拒絶するだろう。

しかし宇宙全体の回帰といった巨大な思想をいったん措いて、同じもののくりかえしということに着目するとき、とりわけ災いと人間の回復というわたしたちの関心・使命にとって、それは決して無縁の現象ではないことに気付く。たとえば毎年毎年同じ日・同じ時刻にくりかえし戻ってくる「あの日」、それを迎える祈りのたたずまい。自身の避難経路を案内する語り部。あるいは外傷性の記憶の再現。高台への移転と海への再接近。防災においても、将来の大災害を「東日本大震災級の」というように過去の災害の再来として捉え、起きた災害を分析すれば常に同じ失敗が繰り返されていることに嘆息する。

実際、九鬼の時間論において宇宙全体の再生は必須のものではない。人間は〈違う仕方でありえたかもしれない〉偶然との出会いにおいて形而上学的時間を生きると九鬼は言う。「橘やいつの野中のほととぎす」という俳句に含まれている時間を九鬼は次のように解釈する。

橘の匂ひがする。嘗て同じ匂ひを嗅ぎながらほととぎすを聞いたことがあつた。あれはいつのことであつたらう。過去が再び現在として全く同じ姿でよみがえつてゐる。橘の匂いといふものによつて「永遠の今」といふ無限な形而上学的時間がそこに含まれてゐる。(九鬼周造全集 3 巻、351 頁)

ほととぎすと橘の香りとわたしとの出会い。その三者の邂逅に根本的な必然性はない。そこでそのとき出会わないこともありえた。その偶然を敢えて運命として選び、「なぜ」と問うとき、同じ場面に回帰している。儂さにおいて何かに出会い、それをふと思い出すことがすでに小さな回帰である。災いの後の生においても、何かを思い起こし、問いなおす瞬間に、あるいは新たな悲劇を繰り返すまいとする決意のうちに、すでに回帰がある。

3. 「復興」と時間

災害の後の生や社会は、直線的な時間と回帰の時間の両方を二重に生きざるをえないように思われる。とくに

災害や復興の出来事や営みは自然観や死生観と深く結びついており、こうした観念は回帰の時間と近い。

わたしはさしあたり、〈同じもののくりかえし〉という在り方に積極的な意味を見出すことも可能だと主張したい。行政組織や巨大企業が同じ失態を繰り返すといった場合は別として、たとえば一人のひとが同じことをくりかえし、同じところに戻ってくることは、必ずしも停滞や未熟や病的なものを意味するのではなく、実存のひとつの表現であると捉えるべきかもしれない。「回復」や「再生」は必ずしも以前からの向上や発達だけではなく、同じところへ立ち戻ってきてしまうということ自体にも、直線的な時間感覚では捉えられないような意味があるはずだ。つまり、不可逆的な前進以外のものも、「復興」は含みうるのではないか。

しかしながら、回帰の時間をまともに引き受けようとするともうひとつの問題に引き渡される。九鬼は出来事を何度でもくりかえすものとして積極的に引き受ける意志を持つと言う。人生の悲苦に根本的な必然性は与えられない。なぜわたしだけがこんな目に／なぜわたしでなくこのひとが、という問いに答えは与えられない。その〈なぜ〉への直面を運命として愛し、同じことを何度でも受け入れる、積極的に意志する、と。

わたしは、この「主意主義的内在的解脱」はどうにもしんどいと感じる。運命を受け入れることと回帰を意志することは同じではない。わたしは過去の災害を自分なりに受け止め、取り消せないものとして受け入れ、怒り、悲しむ。しかし仮に(残りの人生で、あるいは「来世」で)同じことがくりかえされるのだとしても、それを積極的に意志しようとは思わない。「なぜ」と問うてしまふけれど、その問いに自分を縛りつけようとは思わない。

なぜわたしだけが、という問いはひとを孤独にする。その孤独のなかで運命愛に雄々しく開眼するひとはそれでもよい。しかしそうした強さだけが決路なのだろうか。むしろ運命と言い切ることも、全く否認することもできないという宙吊り状態が現実ではなかるうか。問題は、〈なぜ〉を生きた対話に引き留めること、いいかえれば回帰せざるをえない時間の中で、立場を超えた共同性をいかにして取り戻しうるか、というところにある。ひとを孤絶させない「なぜ」の問い方・聴き方があるのではないか。

- 1) 九鬼周造 (2016) : 時間論 他二篇, 岩波文庫.
- 2) 九鬼周造 (2011) : 文學の時間性, 九鬼周造全集第 3 巻, 岩波書店, pp.339-365.
- 3) 真木悠介 (2003) : 時間の比較社会学, 岩波現代文庫.